



佐藤雪山略傳及
算法圓理三臺著者考

二双
1834
2-2





陸軍々醫總監男爵石黒忠恵先生かつて元帥海軍大將伯爵伊東
祐亨君より往年越後國小千谷に有名の算法家佐藤虎三郎君あ
りしことを話されたり石黒先生之れを更に小千谷出身なる陸
軍々醫監石坂篤保君に質せしに同君答ふるに佐藤虎三郎君は
雪山と號し文化十一年に生れ安政六年四十六歳にて歿し曆算
數理に通じ著書亦多きを以てす而して石坂君は其遺著につき
百方搜索の末遂に故人の著書算法圓理三臺一卷を得これを小
千谷の村社二荒神社に納め以て永く傳へんと欲し其の事を余
に囑せり余は因て此書を理學博士三輪桓一郎君に送付してそ
の内容の價值如何に就き充分の批判を乞ふ事とせり三輪君は
又これを學士院に致して三上義夫君に審査を依頼せしに其の

結果當時刊行の諸算書中代表的のもの、一にて和算最高の發展を窺ふに足り當時外人中に在りても之れに匹敵する程の研究をなせるものは蓋し鮮かるべしとの回答を得たり余は此の如き名著述の此儘埋没して全く世間より忘却せられむことを憂ひ原本は石坂君の勧誘に従ひ之れを村社に奉納すると共に更に若干部を印刷に附し有志の士に頒ち以て同郷學者の事業を後世に傳ふるの手段とせり

大正六年七月

西脇濟三郎

佐藤雪山略傳

算法圓理三臺の著者佐藤雪山は越後小千谷の人なり。通稱虎三郎初め諱を忠助と稱し後に解記と改む。又外記に作る。字は子精雪山は其號なり。別に數齋通機堂昂奎等の號あり。文化十一年甲戌正月を以て生る。時恰も寅月寅日寅刻に當れり。故に名を寅三郎と命せり。後、虎三郎と署名す。雪山の父を彌七と云ひ、母は長井氏、雪山は其次男なり。雪山の家系左の如し。

○菊右衛門

佐藤平左衛門弟、分家す。妻イシ、田中松兵衛女。

多喜松。菊右衛門長男。子なきを以て末弟彌七を嗣とす。妻ミツ、田中松兵衛女。

女。他家へ嫁す。

女。同上。

六三郎。他家を相續す。

彌七。

兄多喜松の後を襲ぎて相續、後に菊右衛門と云ふ。妻イシ、長井與右衛門女。



文政六年癸未六月一日死。

二

德太郎。父の後を嗣ぐ。妻ツネ、野澤七之助女。弘化元年歿す。年三十七。

女。他家へ嫁す。

虎三郎。

女。他家へ嫁す。

女。早世。

雪山の家は家名を代々金澤屋菊右衛門と稱し、小千谷の縮布商なり。小千谷は實に越後縮布産出の中心地にして、遠く諸國に之を賣り擴めたれば、商業甚だ繁盛を極め、越後の縮布商は到る處に勢力を及ぼしたり。佐藤氏も其越後縮布商の一にして、家富み業昌へ、雪山は餘裕の間に人と爲れり。されど文政六年、雪山の父彌七の死後は家運衰退して舊の如くならず。加ふるに其兄德太郎は中風症に悩まされ、弘化元年、年三十七にして歿せり。二女ありて男子なく、長女ヒロ、此時年甫めて九歳なりき。是に於て雪山は兄の子に代りて拮据一家の整理に任じ居ること數年、三島郡菅沼なる藤野甚太夫の二男清藏を容れて兄の後を嗣がしめたり。蓋し嘉永四年なり。其後三四年、安政元年に至りて、雪山は分家して藥種商を營むて

となれり。實に雪山年四十一歳の時なりき。

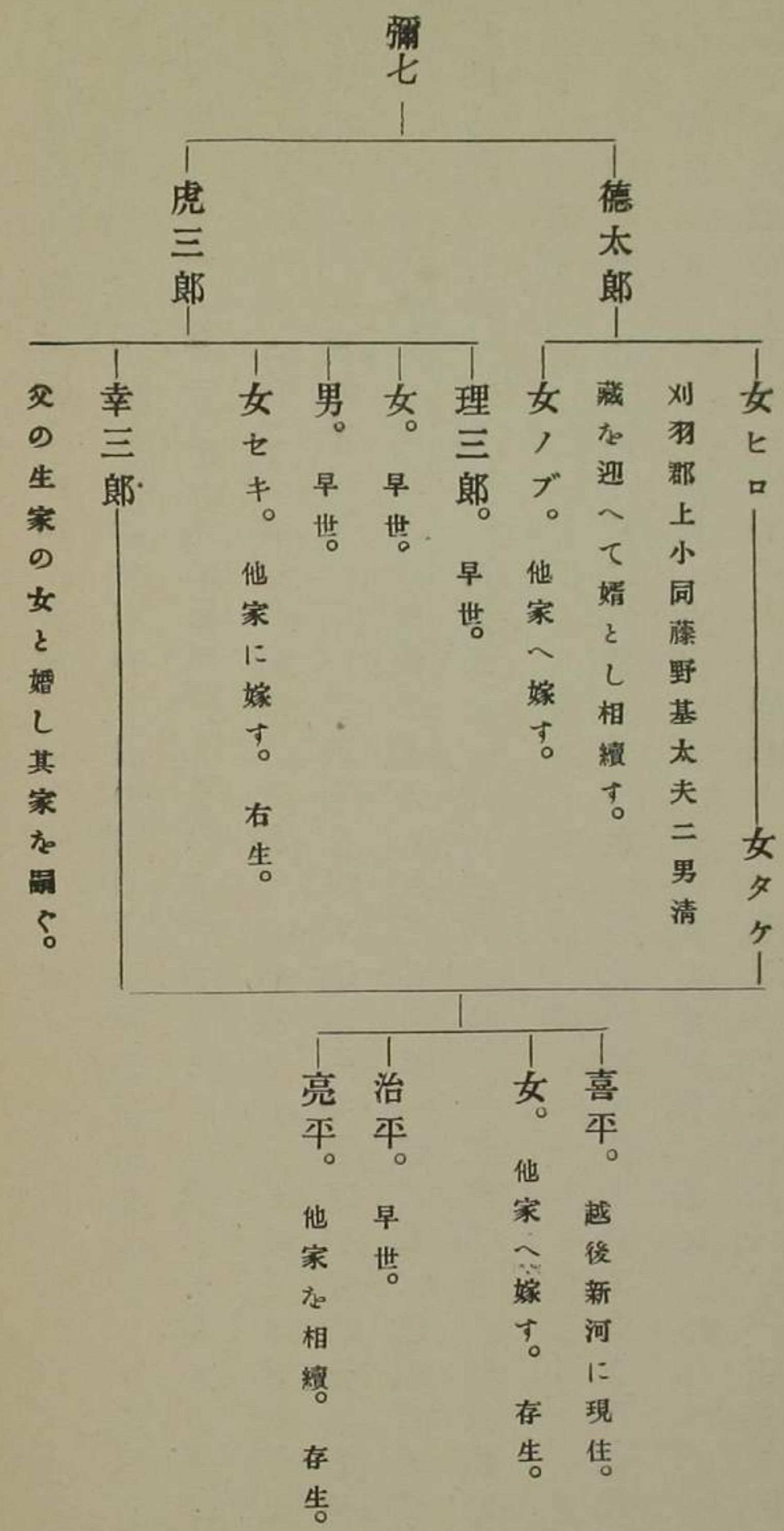
天保十四年二月、雪山年三十、同國三島郡片貝なる藤塚藤五郎女イトを娶り、五男二女ありしが、一男一女の外は皆夭折し、安政二年十一月には妻イト病んで不歸の客となれり。同三年二月、先妻の妹メイを迎へて後妻と爲し、一男を擧げたりしが、同四年十二月、後妻も亦病歿せり。其後三たび刈羽郡平井村高野某の女を容れたれども、生來多病にして、正式に婚儀を結ぶに至らざりき。既にして雪山自らも亦病魔の爲めに侵されたり。高野氏より雪山の門人にして又學友たりし廣川晴軒に送れる書翰によれば、

雪山君舊冬より御不例之處、種々御療治も有之と雖、未快方に不向、此程は腫氣相見候由、扱々困入申候。如何にも大切の事と奉存候。云々。

とありて、尙名醫の治療を請ふやう晴軒よりも勧められたき旨を述べ、其病狀の淺からざるを示めせり。此書狀は五月十六日と記るされたり。其後月餘にして雪山遂に起たず。實に安政六年己未六月十九日にして、齡四十六歳なりき。小千谷壽慶庵に葬り、雪山孤白居士と法諡す。壽慶庵は佐藤家一門の墳塋の在る處なり。雪山子女多し。然れども皆不幸にして早世し、易簣の日には一男一女を存する

三

に過ぎず。雪山の兄徳太郎に二女あり。長女ヒロ、藤野氏の二男清藏を迎へて婿とし、一女タケありて男子なし。是に於て雪山の二兒を收めて養育し、其の男孝三郎の長ずるに及びて之を一女に配し、因て家を嗣がしむ。是に至りて雪山の家は再び其生家に合したり。兩家關係の系圖左の如し。



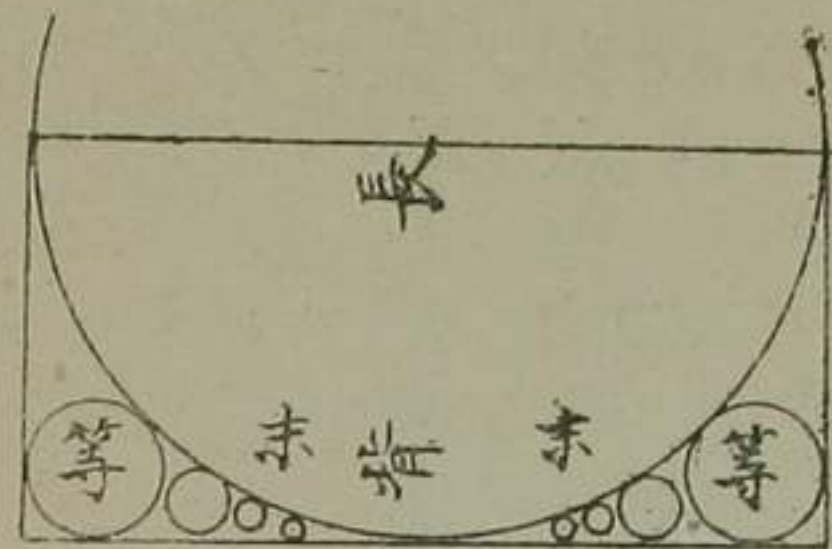
雪山は算學者なり。然れども商家に生れて終生商業に従事せるのみならず、壯年以來家事の係累に煩はさるゝこと多く、あまつさへ屢々妻子を失ふの災厄に悩まされ、身も亦中途病に罹り志を齎らして歿す。之が爲めに天賦の英才を擅まゝに發揮せしむるに於て遺憾尠なからざりしは、多く説くの要なし。然るにも拘らず、幾多の著述を遺し、多數の俊秀を養ひ、名聲一時に馳せて地方に雄視することを得たりしは、決して凡庸人の企て及ぶ所にあらざるなり。

雪山幼にして穎悟學を好み、舉止自ら群童と異なれり。雪山が算數の學に志を立てたるは、年甫めて十二歳の時なりき。曾て群兒と嬉戲することを好まず、祭日と雖も多く外出せず、家事に閑暇あれば即ち靜座して思を數學の問題に馳せ、以て自ら娛み、他に何等の娛樂とする所なし。稍々長ずるに及びて、數學の學修は延いて曆學に興味を感せしむるに至り、家人の止むるをも聽かずして、晴夜には屢々屋上に攀ちて天體の觀測を事とし、夜を徹することありしと云ふ。其勉勵察するに

彌三郎。早世。
 五三郎。早世。
 虎四郎。後妻ヌイの出、早世。

堪えたり。

傳ふる所によれば、雪山初め師事する所なく、獨學にて其妙を得たりと云ふ。然れども未だ以て足れりとする能はざるが故に、山口坎山に従學することゝなりたり。蓋し天保初年に在り、算法題術集覽天保十五年森田強序。雪山が初めて坎山を見たるは天保五年九月二十一日なりしを以て、雪山自筆文、其入門は此時又は其以後にあるべし。此當時に於て雪山の造詣果して如何なるものありしか。之を窺ふに足るべき材料殆んど存せざれども、雪山の著書算法解集に小千谷日光社に奉掲せる算題を載せたり。其算法の額は三種の問題より成り、雪山が仲儀助、渡部太郎の二人と共に奉納せるものにして、實に天保四癸己歲次九月吉日と署せり。天保四年は即ち雪山が二十歳の時なり。此算額に師長の名を記るさゝるより見るときは、雪山或は未だ師事する所あらざりしに依れるか。其算額は即ち上の如し。



所掲小千谷日光社一事
今有如圖直内容隔弧背等圓及逐圓數個。假畫六個只云。長二十八寸。又云。等圓徑四寸。末圓徑一寸。問左右圓數幾何。

答曰。左右圓數六個。

術曰。以末圓徑以下圓徑二字略之除等。開平方。內減一個。乘長等差。以等除之。得左右同數合問。

今有如圖等圓交罅畫四圓。只云。甲圓徑十八寸二分。乙圓徑二十七寸三分。丙圓徑九寸一分。問丁圓徑幾何。

答曰。丁圓徑一寸四分。

術曰。置乙圓徑。以下圓徑二字略之加丙名。加甲。乘乙罅。以丙罅因甲除之。內減一個。以除天。得丁合問。

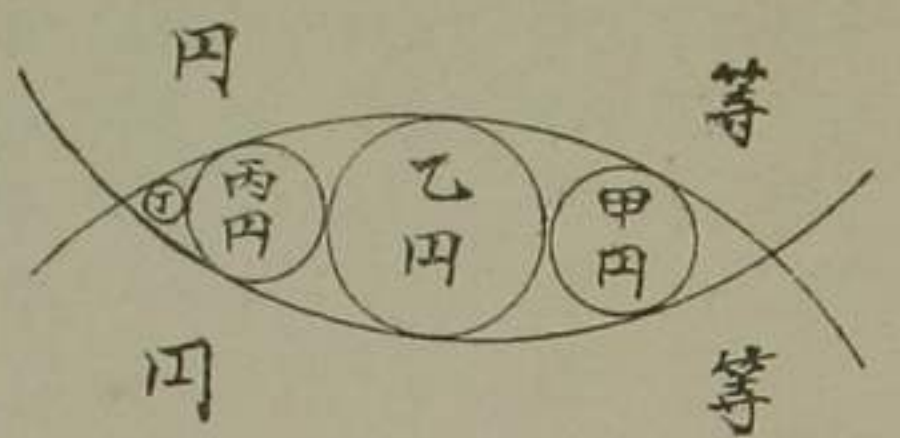
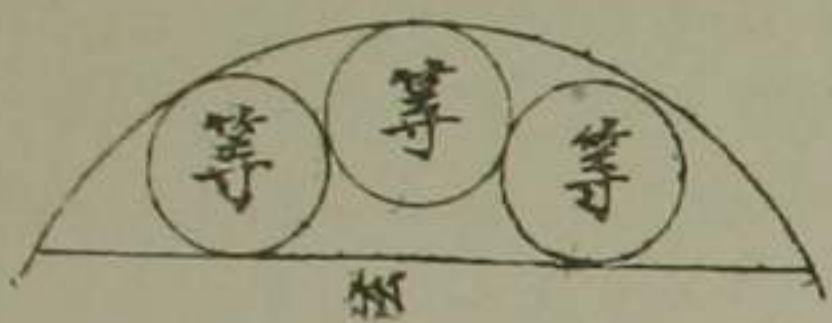
今有如圖弧內三等圓。只云。弦四寸八分。矢一寸二分。問等圓徑幾何。

答曰。等圓徑一寸。

術曰。置矢罅四段名角。加弦罅。以除角。加一個。以除矢。得等圓徑合問。

第一術。小千谷 佐藤虎三郎解記

第二術。同上 仲儀 助算正



天保四癸巳歲次

九月吉日

算法解集には此等三問題の解義をも加へたれども其解義は固より算額には記
るさゞりしものなるべし。算額は寛文年中に始めて現はれしにや其後漸く行は
るゝこととなりて寛政文化の頃より益々多く以て維新後の時代までも及びたり。
今之を見るに問題と術文のみを擧ぐるを常とし解義をも述べたるもの殆んど
之を見ず。是に依りて日光社の算額も亦然りしならんと思はる。此算額今之
を知るものなし。日光社は現今二荒社と稱す。

天保五年雪山は山口坎山を見ることを得たり。因て弟子の禮を執りて之に従
學す。坎山は越後水原スイハラの人なり。或は傳へて云ふ雪山曾て水原妙本寺の算額を
見て之を評せしが會々坎山の聞く所となり爲めに坎山と相識るに至れるなりと。
妙本寺の算額も亦傳はらず。

山口氏通稱七右衛門後に倉八と改む諱は和字を子美と云ひ坎山と號す。初め
業を日下誠の門人望月藤右衛門(初名鐵太郎)に受け後望月の同門長谷川寛に従ふ。

(數學興廢記に據る)。寛西磻と號し即ち初代善左衛門なり。西磻は當時我が數學
界に嘖々たる名望を馳せ眞に一方の雄たり。其事蹟は故遠藤利貞翁の大日本數
學史及び三上義夫著和漢數學發達史(英文、スミス及三上共著和算史(英文)等に散見
するを以て今此に贅せず。天保十四年の二代目長谷川善左衛門門下の社友列名
を見るに、

- | | | |
|----|------|----------------|
| 正統 | 江 戸 | 秋田十七郎宣義 |
| 齋長 | 江 戸 | 平内 大隅廷臣 |
| 助教 | 近江彦根 | 内田 半吾久命 |
| | 江 戸 | 山本安之進賀前 |
| 別傳 | 越後水原 | 山口 倉八 和 |
| | 陸奥一關 | 千葉雄七胤秀 |
| | 伊勢津 | 村田佐十郎恆光 以後列名可除 |
| 伏題 | 筑前福岡 | 久間太六修文 (以下略之) |

とありて山口和の名は實に別傳三人中の筆頭に記るされたり。坎山が長谷川派
の社中に在りて重きを成せるを知るなり。特に二代目善左衛門は初め坎山に師

事せるに於てをや。數學興廢記に

長谷川十左衛門。初名佐藤菊藏。奥州仙臺産也。中略。號北川。字者子道。初業山口和受。名弘。

とあるによりて之を知るべし。十左衛門は後に二代目善左衛門となれり。雪山が長谷川派の錚々たる坎山に従學するに至れるは、其後來の閱歷を作るの上に尠なからざる影響を與へたるなるべし。

雪山の恩師山口坎山が長谷川派の大家たりしは我等能く之を知れり。若し其人の人物閱歷を詳かにせば、雪山を解するに於て得る所尠なからざるべし。然れども我等は多く知る所なきを憾む。唯坎山が夙に江戸に出で、長谷川寛に師事すること年あり、其後廣く諸方を周遊したりしことは坎山が文政庚寅の歲に算術新書に記せる序文に見えたり。其諸國周遊は蓋し文化丙子歳より六年間に在りき算術集覽序に據る。大日本數學史に文政四年山口某なるもの文化十三年より六年間四方を周遊せる結果として周遊算草の書を著せることを記せるは即ち坎山に外ならざるべし。我等は未だ其書を見ざるを悲む。

雪山、山口氏に就きて算學の研鑽に従事すること數年にして、三題の免許を得た

り。其中見題、隱題は、天保九年戊戌八月十五日に受け、伏題は同十一年庚子十月十五日に受けたり。是に於て其業大に進む。此年秋、長谷川氏初代西藩翁が其前々年に病歿してより三年の忌に當りたれば、山口氏は雪山を伴ひて先師墓參の爲めに江戸に來り、其序でに同派の傳統たる秋田宜義をはじめ諸多の學友に雪山を紹介し、其學才の凡ならざるを推賞して措かず、即ち

今は年老て弟子を教ふるももの憂く、物考ふるも煩はしければ、此處六字不明ふいにやめて、殘りの齡を養はんと思ふにつけて、さばかり年頃心入れたりし道を徒にせんも流石にて、弟子の中に同じ國小千谷の人佐藤虎三郎こそ此道に賢く才優れたれば、學び考へ得たることも殘すかたなく傳へおきて、何事もたとたどしからねば、數學の業をば此人に譲りて世に傳へんとす。

と言ふに至れり。(天保十一年山本賀前ちらし文。坎山が雪山に望みを懸くるの深かりしこと想ふべきなり。是に於て坎山が同門中の高足たる山本賀前は雪山を學界に紹介するのちらし文を作りて之を配布し、次の如く述べたり。

げにも山口氏の此人よと思ひ定められたるも、しかく年猶若けれども、道に妙なることいふべくもあらずなん、されば是れまで山口氏に事問ひし人は更にも云

はす、今より後かの人の學風を慕はん人々は、佐藤氏に問ひよりて學び給へかし、
(同ちらし文に據る)。

此によりて觀るに、雪山は單に山口氏の愛弟子たるのみならず、山口氏は此時既に雪山を以て自己の後繼者たらしめんと欲し、同門の幹部に於ても之を公認したりしを知るなり。

雪山が更に進んで別傳の免許をも許されたるは、此後二年、即ち天保十三年初冬にして、雪山時に年二十九なり。此時長谷川派にありて別傳免許を有するものは、蓋し數人に過ぎず。雪山は其數人中の一人たるなり。元來關流には別傳の上に印可の免許なきものあり。然れども當時印可を得たるものは、多く之を聞かず。別傳は殆んど當時の最高學位たる價值を有したり。雪山が關流正統八傳を稱するに至れるは、此免許あるが爲めなり。關流八傳とは即ち流祖關孝和より荒木村英、松永良弼、山路主往、安島直圓、日下誠、長谷川寛、山口和を傳て八たぶ傳へたるの謂なり。

雪山の師坎山は蓋し嘉永三年に歿せり。歿するに臨み其子兵左衛門に遺命して長谷川先師より傳へられたる端緒の硯を形見として雪山に贈らしめたり。其

意は兵左衛門の書狀に盡くせり。

一書啓上仕候。追日薄暑之節に相成候處、貴家被爲揃愈御清寧被成御起居、恭賀至極奉存候。然者從長谷川大先生亡父に傳來之丹珪之唐硯、貴所様え御傳來可申旨任遺言、則御傳達申候。誠藝事之爲冠者愉快之至に存候。將又貴所様御開傳之御門弟子へ從先例又々御讓可被成候。且傳來書者差當見へ不申候。其内相調差上可申候。右者傳硯添書旁如此御座候。恐惶不備。

嘉永四辛亥歲

七右衛門倅

五月十六日

山口兵左衛門印

佐藤虎三郎様

尙々昨年中御香奠御贈進被下、御懇念辱次第奉存候。御序御禮申上候。再拜此書狀並びに硯は現に廣川利兵衛氏の所藏に屬す。

雪山は兄の死後家業を執るに及び、自宅に數學道場を開きて、數學天文究理等の學を教授せり。遠近雪山の名を聞きて從學するもの多く、其家に寄寓するものも常に數人を下らざりしと云ふ。雪山門人錄の現存するものにつきて見るに、

高弟師範代

野州本澤 廣瀬周平融
當國白根 小泉清兵衛保定

助教

當所

瀧澤虎之丞解直

長岡中島

阿部留藏政明

學頭

與板藩

松浦留次重内

長岡在寺島

南五兵衛亮方

長岡千手

吉澤作右衛門義利

以下、更に廣川魯、小船井解安、森田強村、山禎治等二十八人の姓名を記るせり。尙二三の姓名あれども後の添加なるべし。中につきて村山禎治は通機算法の刊行ありて、其名最も知られたり。現に八十八歳の高齡を以て存生す。廣川魯は晴軒と號し、其究理學の功績は頗る著きものあり。其著三元素略説の概要は大正四年十月の哲學雜誌に三上義夫の論究する所ありたり。此門人録は雪山門人の全體にあらざること論なし。圓理三臺に名を署するものは皆此中にあれども、算法題解

集解坤卷に雪山佐藤先生門人自問自答として諸問題と其術文とを擧ぐる所に姓名を録せられたるものは十八人中一二を除くの外は此録中に見えず。此等門人名によりて天保四年雪山と共に算額を奉納したる仲及び渡部の二人も亦雪山門下の人となれるを知るなり。恐くは初め學友にして後之に従學するに至れるものなるべし。渡部は後に姓を小林と改めたるが如し。題術集解によれば、長岡の岡村賀明も亦雪山に學べる如く思はる。賀明元と望月氏の高弟高橋知足の門人なり。

雪山又商用を兼ねて屢々三都に往復したりしが、其途次各地の算家を歴訪したりしものゝ如く、其著述中に周遊算話なるものありて、其書は現に之を見ることを得ざるも、算法題術集覽坤卷の終りに、

此書は雪山算術心試の初より諸國に至り普く諸家名人と算術妙旨を談せし處の話を示せり。

との解題あり。此周遊算話なる書は果して完成したりしや否や之を確むるに由なきも、之が記述の希望ありしは言ふまでもあらざるべく、之によりて諸國周遊の事の事實なるは疑ふべからず。京阪地方及び其他の諸大家と交通し、又諸方の算

家の屢々尋ね來れることは、雪山著述中の諸所に記されたり。安藝の人法道寺和十郎は安政二年に雪山を來訪し、其六年再び來りしも、雪山の歿後なるを以て辭し去りたり。算家としての雪山の名聲は年と共に益々高きを加へ、雪山が周遊中に達算を以て稱せられたる逸話は、今尙郷黨の間に殘れり。

雪山は曆學に於ても安政五年十月土御門家より曆道熱心の願意聞届けられたり。是より先き嘉永の頃、菊右衛門の名にて京都大經師降屋内匠の配下として弘曆の免許を得置きたりしが、是に於て公然曆年を推歩して頒曆の參考に供せるを知るべし。

雪山著書頗る多し。刊行する所は一の算法圓理三臺あるのみなれども、草稿に屬するものは、蓋し少なからず。然れども明治十六年其家に災厄ありて、藏書悉く散逸し、今は此時諸門人の手に歸せるもの、一小部分を存するに過ぎず。此等殘存のものを見るも、雪山の造詣は略之を窺ふに足れり。左に之を列記すべし。

- 一。圓理算法之解。佐藤雪山先生自問自答。點竄問題。黑點軌跡問題。精要算法問題解等あり。自問自答と記るせるものも間々あり。
- 二。階梯算法解。

三。氣海觀瀾補數。越後佐藤解記補數。

四。軌線草稿。(算法圓理軌線)。天保十一年庚子初春佐藤氏藤原解記述。探頭算法第七番黑點軌跡の解を試み、之を他の問題に應用せり。圓理新々の寶珠形を桃形と改む。

五。五明前集解。

六。五明算法後集卷之下附錄弧中七圓術の解。

七。黑點軌線草稿。

八。佐藤解記算術集解。

九。算法圓理集解。雪山佐藤解記子精編。算法圓理鑑所載五ヶ條を解せるもの。

十。算法圓理求積算術解。算機算法及び溫知算叢の算術に關する問題を解す。

十一。算法圓理算術解。一十三條。雪山、古今算鑑、社盟算譜、算機算法、等の問題の解なり。

十二。算法圓理算術集解。佐藤虎三郎解記編集。雪州藤岡。宇宙堂内田門人武田、水戸檜山等の解を集む。

十三。算法圓理集解。雪山佐藤虎三郎解記編。算法圓理鑑、圓理起原表附録、圓理新々等の問題の解。及び自問自答。

十四。算法圓理集解。長立圓を或る厚さにて中空とし、其内部の面積を求むる問題。順天堂算譜二ヶ條の改術等あり。寶珠平形の周を求むる問題につきては

如く附記せり。

右ノ一則者難題ニシテ世ノ達算ト雖モ得ベキ術ニアラズ。解記者前人未發ノ奇術ト云ベシ。天上天下達算於天於地我一人。通機堂佐藤解記。

十五。算法圓理表解。乾。佐藤虎三郎解記子精編。天保七丙申春序。圓理表の製法を解説す。

十六。算法圓理篋集。算法圓理鑑及び圓理新々の問題の解あり。

十七。算法解集。二卷。諸算書の點竄問題解なり。天保四年小千谷日光社の算額は此書に見ゆ。

十八。算法記。雪山自問自答。圓理極數問題の解義なり。

十九。算法稱水術。

二十。算法題術集覽。乾。江戸山本安之進賀前北越佐藤虎三郎解記同編。天

保十五年森田強序。藤樹山本先生門人自問自答。

二十一。同上。坤。北越佐藤虎三郎解記、江戸山本安之進賀前編。雪山佐藤先生門人自問自答。中に雪山長男理三郎名義の算題をも含めり。

二十二。算法釣題手引草。佐藤虎三郎解記編。重心問題を解説す。

二十三。算法率術指南。雪山佐藤解記創製。順天堂算譜の變弧形に關する二三問、算法瑚璉の問題の解等あり。

二十四。初學手引五十問前編。佐藤虎三郎解記、岡村半四郎賀明編。問題集にして術文を擧げず。

二十五。同上後編。著者同上。

二十六。同上後編。著者同上。此後編二部は内容同じからず。但し問題集たるに於ては異なる所なし。表紙裏に數齋先生著岡村先生訂、通機堂藏と記るせり。公刊の意なりしこと知るべし。

二十七。セーヘルコンストブック。雪山佐藤解記子精編。算法淺問抄、探願算法、社盟算譜等の問題解なり。蘭語の表題面白し。他の諸書にも表紙に蘭語を附記せるもの往々之を見る。

- 二十八。關流算術草稿。雪山佐藤解記解。
- 二十九。雪山算題聚解。號曰算法旗揃。雪山編。點竄問題の解義にして、算法雜俎、圖理括發附録等の問題あり。
- 三十。雪山算題聚解。五明算法後集古今通覽等の點竄問題解なり。
- 三十一。雪山算題聚解。區揭算法、算法雜俎、神壁算法、社盟算譜、算法奇賞、精要算法、探頤算法等の點竄問題の解義及び改術なり。
- 三十二。宅間 兩流算法。
- 三十三。逐差式開商表併解儀。
- 以上は現存の諸算書なり。算法圖理三臺及び算法題術集覽の卷尾に記るす所によれば尙數種の算書を刊行するの意ありしが如し。其諸算書には既に成れるものもあるべく、又編述の希望ありしものもあるべし。今之を左に録す。
- 一。算法圖理集解。全五冊。雪山佐藤先生編。
 - 二。算法珍題集解。全二冊。通機堂塾著。
 - 三。算法相場珍好録。全二冊。北海佐藤先生編。
 - 四。周遊算法。全三冊。雪山先生著述。

五。算法旗揃。一卷。雪山先生塾編集。其解題を見るに、前記の雪山算題聚解

號曰算法旗揃とは同一書にあらざるが如し。

六。算法是非問答錄。二卷。雪山先生述。

此書ハ數道ノ究理トイヘドモ尙盡シ及バザル所アリ。然リ後世恐ルベキ乎。古ヨリ今ニ至リ未發ノ新術出シコトヲ述、其中不正不調アル儀、我が非ヲ初メトシテ諸算書ノ選者不順不正ノ意ヲ述ベタリ。

七。算法究理開宗。雪山佐藤解記述。

夫天地間萬物數ニ因ラザルコトナキハ世人知ル所ナリ。此書ハ天地間萬物分析ノ數ニ本ヅキ諸ノ瓦斯原素集合シテ動植物體ヲナス。其原素多少ノ分量ニ依テ異體ノ變化ヲナス數理ヲ示シ、尙天文地理ノ測量、諸學ノ用數及醫藥分量ノ多少ニ依テ能力ノ異ナル數ニ至ル迄究理ヲ述ベタレバ、海内ノ諸士稽古ニ志シ有ル人ハ、此書ニ於テ理ヲ決定スベキノ書ナルベシ。

八。俗說疑惑辯。三卷。雪山先生考定。

九。命理天文考。二卷。同上。

此書ハ天地萬物ノ始終ヲ理解セシ書ニシテ、第一日月星辰ノ始リヨリ、宇宙ハ

動植物始リ、主トシテ萬品腐敗ノ中自ラ蟲ヲ生ズ。其蟲性ヲ受ケテ生キル理ニ至ル迄詳カニ其意ヲ示ス。自然世ノウツリユク有様、誠ニ先生ノ考定妙ト謂フベシ。

十。雪山運氣新論。全二卷。

十一。雪山易新説。二本。

算法圓理三臺著者考

三 上 義 夫

算法圓理三臺は普通に佐藤雪山の著述なりと信せらる。雪山の高弟村山禎治翁の如きも爾か語られたり。然れども此書實は佐藤虎三郎解記、南五兵衛亮方編、吉澤作右衛門義利訂と署し、雪山の著述なりとは記るさず。其の現に署するところ眞なるか、將た世に言ふ所僞なるか。少しく之を考ふるの要あり。

和算書には其實際の著者と名義の著者と同一ならざるもの往々あり。師の筆に成りながら門人名義にて公にされたるもの、如きは、蓋し少なからざるべしと云ふ。是れ獨り算書にのみ然るにあらずして、他の學科に關するものにも同様の事情ありき。斯の如きは主として二つの理由に基けり。一は所信未だ熟せずして或は世の非難を受けんことを恐れ門人名義にて之を世に問ふものにして、一は經濟上の關係より來れり。久留米侯有馬頼僅が侍臣豊田文景の名を以て拾磯算法五卷の書を作れる如きは、前者の一例に屬す。久留米藩に豊田文景なる人物あ

りしや否やも實は明らかならず。經濟上の關係とは即ち門人をして印刻の出費を負擔せしめ、その代償として名義を藉すことの流行なりき。算書の如きは世の需用多からざるが故に、之を上木せんには勢ひ作者は其費用を支出せざるべからず。之が爲めに門人等をして之が負擔を分たしむるの風を生じたり。諸算書に多く附録を附して門人名義の諸問題を集むることの行はれたりしも、此諸門人をして費用の幾分づゝを分擔せしめたるに依れり。其名義人が眞の作者たる場合は固より絶無にはあらざるべし。而も兩者の一致せざる場合も亦甚だ珍らしからず。其確證の残れるものも往々にして之を見る。明治大正時代に於ても眞の作者にあらざる人の名をして公表されたる著述類の尠なからざるより見るも、蓋し思ひ半ばに過ぐるものあるべし。

和算界には斯の如き風習行はれつゝありき。果して然らば、算法圓理三臺も雪山の著述にてありながら門人名義にて刊行されたりとするも、何等怪しむに足らざるなり。雪山の作なりと信せらるゝもの決して故なきにあらず。然れども其眞僞を決せんには、更に考察する所あるを要す。

南亮方、通稱五兵衛、長岡附近寺島の人なり。代々農を業とし、家甚だ富みたり。

算學を雪山に受け、其高弟中の一人となれり。然れども南氏造詣の如何は、今之を詳かにするに由なし。亮方嘉永年間を以て年三十七にして逝き、後其家も亦産を傾くるの厄に逢ひ、子孫は流離し、遺書の尋ぬべきなく、里人も亦知る所なしと云ふ。其家若し現存し、遺書も亦保存せられて、具さに之を検するを得ば、其人の學術は之を明かにするに難からざるべし。然れども今や詮なし。根本的に之を究むるが如きは固より望むべからず。

算法圓理三臺は普通に上述の如く署名せり。されど間々其著者閱者等の姓名全部を除けるものあり。何の意より出でしものなるかは、我等固より解せず。

今、圓理三臺の諸本を比較するに、其内容に於ては悉く一致するを見たり。然れども此書の發行所は幾たびか轉々したり。一本には通機堂藏とし而して越後水原書林小田島氏の名を記るせるものあれども、他の本には江戸岡田屋嘉七板又は江戸永樂屋丈助發行と記るせり。又諸本多くは弘化三年丙午八月稿成と記るせり。一本には八月刻成と記るせり。其刻の字は何等注意を惹くべきものなきも、稿字に至りては他の文字よりも形大にして、一見直ちに後に補へるものなるを知る。其刻字の記入あるは水原書林發行當時の刻本に在り。稿字は後に改めたる

ものなること益々明らかなり。此刻字の記入ある水原刻本には、書林名の次に

越後 魚沼郡小千谷佐藤虎三郎守成筆工

古志郡寺島村南五兵衛亮方

と記るせるもの見ゆ。雪山の自筆にて草稿の成れることを言ふの意なるは明らかならども、こゝに南氏の姓名を記るせる意義は明かならず。隠密の間に實は雪山の著述なることをほのめかしたるものにやあるべし。

余が藏する圓理三臺の一本は、他の點には別に異なることなきも、背面の表紙の裏に

佐藤虎三郎著

嘉永二己酉年五月

江戸本銀町二丁目

書林

永樂屋丈助

と印刻したり。嘉永二年と云ふもの、此書板木の永樂屋に傳はれる年時にやあるべし。そは兎もあれ、此本に佐藤虎三郎著と明記したるは、輕々に觀過し難きものあり。斯の如く卷頭の署名とは異なる別の署名を見るもの、蓋し他に多く其例

なき所なるべし。岩井重遠関にして其門人の編と銘打ちたる圓理冰釋の終りに劍持章行撰と記るせるもの等二三の之れ有るを知るのみ。圓理冰釋實は劍持の著作なりとは、故人萩原禎助翁の屢々談らるゝ所なりき。

人或は言はん、三臺の一本に佐藤虎三郎著と記るせるものあるは、雪山の名望隆たるに反し南氏は知らるゝ所なきを以て、其名望に依頼せんとの奸策にあらざりしやと。若し斯の如き奸策行はれたるものとせば、是れ即ち作者と名義との同一ならざるものあること世に信せられたるに依らざるべからず。其風習ありしことは遂に否定すべからざるなり。

算法題術集覽は雪山及び山本賀前共編の稿本なり。其乾卷に雪山門人森田強の記るせる序文は天保十五年甲辰立春之日と署したり。此書坤卷に雪山男北越小千谷佐藤理三郎解勝の名を以て稍々高尚なる問題の解を載せたるものあり。理三郎は雪山の長男なり。天保十四年癸卯十二月八日に生れ、弘化三年丙午十月十二日に死せり。行年僅かに四歳、實は滿三年に充たず。況んや天保十五年春は生れて未だ數箇月を出でざるの時にあらずや。理三郎の手を下だせるものにあらざるべし。何人と雖も之を疑ふの餘地あらざるべし。一算題に嬰兒の名を署せ

るは全く慈愛の意を寓せるなり。而も之に依りて、名義を籍すの風ありしことは益々立證さるべきのみ。他に此種の例證を求めんには多く之を列舉するに難からざるべし。されど事、雪山と直接の交渉なきを以て、今は之を試みざるべし。

之を要するに、圓理三臺の書は、寺島村南某の作る所にあらずして、雪山苦心の著作なりしこと、世に信せらるゝが如きものなりしなるべし。我等は爾かく信せむと欲するものなり。今此書の翻刻に當り、聊か見る所を記るすと云爾。

大正五年九月二十八日

大正八年五月十日印刷
大正八年五月十三日發行

〔非賣品〕

著作兼
發行者

新潟縣北魚沼郡小千谷町九十五番地
西協濟三郎

印刷者

東京市京橋區宗十郎町十五番地
中島丑之助

印刷所

東京市京橋區宗十郎町十五番地
會社 東京國文社

